

令和6年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川中学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準を維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査実施月日

令和6年4月18日(木)

3 対象学年

女川中学校第3学年生徒 38名

当日実施生徒 36名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語、数学
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	宮城県との比較	全国との比較
本校の国語	やや下回っている(▼)	下回っている(▼)
本校の数学	下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

① 調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・ 全国平均及び宮城県平均を下回る結果となったが、正答率の開きが大幅に減少し、上位群の正答率が伸びている。
- ・ [知識及び技能] の(2)「情報の扱い方に関する事項」において全国平均及び宮城県平均を上回る結果となった。「根拠」や「具体例」についての理解が定着しているとともに、情報と情報との関係性を理解する力が身に付いていることが分かった。
- ・ [思考力、判断力、表現力等] における「C読むこと」(問題番号2一及び4二)については、全国平均及び宮城県平均との開きが小さく、正答率が伸びている。
- ・ 選択問題に関しては無解答率が低く、「解答しよう」という意欲が見られた。

(課題)

- ・ [思考力、判断力、表現力等] については全ての領域で全国及び宮城県の平均を下回った。
- ・ 記述式の問題において、無回答率が11.1～22.2ポイントであった。また、記述式の問題の中でも、「A話すこと・聞くこと」の領域における「自分の考えを書く」問題の正答率は、全国及び宮城県の平均を大きく下回っている。自分の考えを書く、説明する、要約するといった「書くこと」に対する苦手意識が大きいことが分かった。

- ・[知識及び技能]における「我が国の言語文化に関する事項」(問題番号4三)の行書の特徴を理解しているかどうかを見る問題については、正答率が全国平均及び宮城県平均が70%を超える中、選択問題であったが、本校生徒の正答率が50%に留まり、全国平均及び宮城県平均を大きく下回る結果となった。

②指導改善のポイント

- ・問題に対する苦手意識や消極的な姿勢を克服するため、段階的に課題解決に臨ませたり、ヒントカードを用意して取り組ませたりする。「できる、分かる」実感が得られる授業を展開することで生徒の学習に向かう姿勢を養い、[思考力、判断力、表現力等]の向上を図る。
- ・漢字指導や行書の特徴、表現技法等については、これまでどおり毎時間小テストを行うことを継続するとともに、繰り返し学習する機会を設定することで定着を図る。
- ・教材や発問に対して自分の考えを持つことが苦手な生徒に対して、ヒントカードを渡したり単語だけでも書くように促したり、ペアやグループ、集団において、友人の意見を聞いたり見たりして自分の考えを構築する(書く)機会を多くし、自分の考えを書くことに慣れさせていく。

③質問紙から

○国語への興味・関心

- ・「国語の勉強が好き」という質問事項に対して否定的な回答をした生徒が約20%程度いた。しかし、「国語の勉強は大切だ」という質問事項に対して生徒全員が肯定的な回答をした。さらに、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役立つ」という質問事項に対して肯定的な回答をした生徒が約90%おり、ほとんどの生徒が国語の学習の必要性を認識していることが分かった。
- ・「国語の授業はよく分かる」という質問事項に対して肯定的な回答をした生徒は約80%を超えており、全国平均及び宮城県平均にはやや及ばなかったが、同程度の割合となっている。
- ・上記を踏まえ、国語の授業において、実生活に即した場面を想起させたり、身近な題材を取り上げたりするなど、学習の必要感(課題に取り組む目的意識等)を更に具体的に持たせる工夫を凝らしながら、内容の理解につなげていく。また、「授業はよく分かる」と回答しているにも関わらず、全国平均や宮城県平均に及ばない正答率となった。授業で学習して理解したことを、深めたり定着させたりするためには、家庭学習への取組が必要不可欠である。そのため、家庭でのAI型学習教材(キュービナ)の活用等、生徒が積極的に家庭学習に取り組むよう、保護者の協力を得る必要がある。

○学習に向かう力の育成に向けて

- ・[思考力、判断力、表現力等]の各領域における授業への取組に関する質問事項に対して、肯定的な回答をした生徒が約80%以上おり、概ね学習に目的意識を持って取り組んでいることがうかがえた。引き続き、課題設定の工夫や、協働的に学習する場面を設定するなどの授業を展開し、目的意識や伝える相手への意識を持ってアウトプットする活動に取り組ませていく。
- ・「文章で書く問題についてどのように解答したか」という質問事項に対して、「解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりしたものがあった」「書く問題は全く解答しなかった」と回答した生徒が約30%いた。約70%の生徒が最後まで努力できたことを評価しつつ、問題に取り組む前に諦めたり、苦手意識から取り組まなかったりする生徒の状況改善に向けて、授業の中でよい発言や考えを認める場面や他者から自分の考えを受け入れられる場面を意図的に設けるとともに、様々な題材で書く機会を取り入れて苦手意識の解消を目指す。

(2) 数学の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・平均正答率において、昨年度に比べ、宮城県との差が5ポイント、全国との差が6.5ポイント縮まった。
- ・平均正答率において、正答数の中央値は、全国平均及び宮城県平均よりやや下回っていた。また、正答数分布グラフは8問を境に二分されており、正答数の少ない左に分布が偏ったグラフになった。
- ・学習指導要領の4領域の平均正答率状況において、全体的な傾向は宮城県や全国のそれと同様の傾向にあった。4領域の中では「数と式」領域における正答率が全国平均及び宮城県平均と大きな開きがあり、他の3領域と比較しても大きな差となった。
- ・「選択式」「短答式」「記述式」の問題形式のうち、「選択式」の問題において無解答率が低く、生徒の「解答しよう」とする意識の表れととれる。しかし「短答式」「記述式」に関しては正答率、無解答率共に大きな開きが生まれた。
- ・「短答式」問題（全6題）において、4題で正答率が約45%を超えた。基礎的・基本的な知識や計算力を身に付けている生徒が約半数いることが分かった。
- ・「数学の授業の内容はよく分かる」という質問事項に対して、肯定的な回答を選んだ生徒の割合は約80%を超え、全国のそれと比べて10%上回った。

(課題)

- ・本調査における宮城県、全国と比較した場合、本校生徒の数学の学力は低い。
- ・数学的な思考力、表現力を問う問題に苦手傾向が強い。
- ・文章を伴う記述が必要な問題への無解答率は高く、正答率が低い。

②指導改善のポイント

- ・知識や技能の定着を向上させるために、ワークの問題に繰り返し取り組ませる。
- ・根拠を示しながら数学的に文章を構成していく指導を継続し、力の定着を図る。
- ・図形において、問題を分析して考える等の見方・考え方を生徒に定着させるために、様々な問題に取り組ませる。

③質問紙から

数学に対して肯定的な回答を選択している生徒が多かったことから、これまでの指導を継続するとともに、以下の取組を実践していく。

(ア)「基礎的・基本的な知識・技能」

- ・ワークを用いて問題を多くこなし、授業でその取組を個別に承認していくことで、「授業で学ぶ→復習する」のサイクルを確立する。
- ・単元テストを、1単元内で複数回繰り返し実施する取組を継続し、「できる」「分かった」という実感を持たせる。

(イ)「活用する力」

- ・計算方法、図形等の性質、公式や定理を確認する際、その根拠や関連事項についても確認する。生徒が計算方法等を理解した後に、問題演習時間を多く設定したり、応用問題を与えたりする。

(ウ) 学習に対する興味・関心等について

- ・過去の学習がどのように今日の学習に生かされているかを考えさせながら授業を展開する。
- ・ICT 機器を活用し、問題の解釈を促すとともに、理解の深化を図る。

7 生徒質問紙調査結果から (○成果、▲課題)

(1) 生活習慣・学習習慣について

- 朝食を毎日食べて登校している生徒が、約70%以上いる。
- 毎日同じ時刻に寝ている生徒が、約70%以上いる。
- 毎日同じ時刻に起きている生徒が、約90%以上いる。
- スマートフォンやコンピュータの使い方について、40%の生徒は家族との約束を守っている。
- ▲ゲームを行う時間、SNS・動画を視聴する時間が、1日3時間以上の生徒が約35%いる。
- ▲スマートフォンやコンピュータの使い方について、約束を守っていない生徒が約40%いる。

(2) 規範意識・自己有用感について

- 将来の夢や目標を約60%の生徒が持っており、全国平均及び宮城県平均と同程度である。
- ▲いじめについて、ほとんどの生徒が「いじめはどんな理由があってもいけないこと」と認識しているが、一部「当てはまらない」と回答した生徒がいた。
- ▲困りごとや不安を相談することを苦手としている生徒は、約35%いる。

(3) 学習に対する興味・関心等について

- ▲家庭で、平日2時間以上の学習時間を確保している生徒は約30%程度、それに満たない、もしくは確保していない生徒が約70%いる（休日については、2時間以上が約20%程度、それに満たないが約80%近くになる）。
- ▲約80%の生徒が、新聞をほとんど読まない、または全く読まないと回答している。

8 今後の取組

(1) 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

- ①生徒が「何が分かったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の継続と工夫
 - ・生徒の実態に加え、宮城県教育委員会の示す「子供の学びを支援する5つの提言～自立した学習者の育成を目指して～」を受け、協働的な学びを取り入れた授業展開が効果的と捉え、校内研究副題に掲げて取り組んでいる。協働場面において、習熟度が高い生徒にとって、教えることは理解をより深め、習熟度が低い生徒にとっては、同級生に教えてもらえる安心感を得ることができ、双方により効果が持たせられると考えている。
 - ・学習課題の設定場面において、生徒の実態に応じて課題を吟味する。取り組む内容を明確にすることにより、学習に向かう姿勢と学習意欲の継続を図る。
 - ・校内研究により、生徒に身に付けさせたい「確かな学力」を明確にし、教師が互いに授業を見合うなど、学力向上に向けた指導力の向上を目指す。
 - ・家庭学習と連動した授業づくりを模索していく。（例. 自己調整学習の実施）
- ②個に応じた学習支援の継続と工夫
 - ・各教科で現在進めている小テストや単元の振り返りシートなどを活用し、生徒個々の習熟度を把握すると共に、生徒の実態に応じた学習課題の設定を一層工夫する。
 - ・教科の特性により、習熟度に応じた少人数学習やチームティーチングにより、学習支援を継続していく。

- ・ A I 型学習教材(キュビナ)を活用し、過去の学習内容を確認したり、個に応じた振り返りや復習を行ったりする。(全員がキュビナに取り組むQタイムの設定)

③ I C T 機器の効果的な活用

- ・ 生徒の苦手箇所を I C T 機器で置換することによって、学習への取組を阻害しているものを取り除く。
- ・ 小学校との連携の中で、基礎となる学習(読む、書く、聞く等)の定着と学習規律の確立を図る。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

① 基本的な生活習慣の確立

- ・ 生徒会執行部を中心に進めている「スーパーうみねこルール」の改訂を通して、生活のリズムを整え、現実的かつ健康的な生活を送ることへの意識を啓発する。
- ・ 生徒会の保健・安全委員会で実践している「スマイルタイム」に、真剣な態度で臨んでいく。これを受け、自分の生活の振り返りから生活改善に結び付けながら生活習慣の確立を図る。

② 自己有用感の涵養

- ・ 学級活動や学校行事で生徒の活躍の場を意図的に設ける。これらへ取組を通して、生徒の個性や得意なことを認めたり、生徒が自身の活躍を振り返ったりすることで、「よかった」と思うことができるようにする。
- ・ 生徒の希望や特性に応じた上級学校の紹介はもちろんのこと、学科や学習環境だけではなく、就職とも結び付ける。また、奨学金等の学習支援の制度などを紹介し、自分にふさわしい進路選択ができるように進路学習を進める。

③ 家庭学習の定着

- ・ 各教科の学習内容や提出課題の内容を朝の会・帰りの会等でも確認する。
- ・ 学習を苦手とする生徒に対し、無理なく取り組める家庭学習の方法を提示し、学習習慣の構築・定着を図る。
- ・ タブレット端末を持ち帰らせ、自宅学習への活用を促したり、オンライン学習を実施したりする。

(3) 女川小学校、女川向学館、地域との連携強化

① 小学校との連携

- ・ 校内研究の主題や副題、目指す児童・生徒像を小学校・中学校で共通のものとする中で、9年間を見通した指導を行う。また、定期的に小中教科部会を行い、学習状況やその他の情報交換を行うことで各教科の指導においても9年間を系統立てて指導する。
- ・ 中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行う。
- ・ 校内研究に基づいた提案授業を実施し、お互いに見合っけて検討する。

② 女川向学館との連携

- ・ 放課後、夏休みの学習会における学習支援に協力してもらおう。
- ・ 各種検定において、実施協力を得て、検定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③ 地域人材の活用

- ・ 女川町教育委員会生涯学習係との連携を深め、「家読の日」の啓発を行い、「読解力」を身に付けさせる手立てとする。

- ・総合的な学習の時間に取り組んでいる「潮活動」では、地域の人々を中心に講師として招き、各講座の学習を進める。